

学生が主体的にデザインする実習—統合実習の試み

西園貞子¹⁾ 勝井伸子²⁾ 箕浦洋子³⁾ 橋口智子⁴⁾

1) 奈良学園大学 2) 奈良県立医科大学 3) 関西看護医療大学 4) 奈良県立医科大学附属病院

Clinical Practicum as Student Initiated Projects : The Experiences of 4th Year Nursing Students in Comprehensive Nursing Clinical Practicum†

Teiko Nishizono ¹⁾ Nobuko Katsui ²⁾ Yoko Minoura ³⁾ Tomoko Hashiguchi

¹⁾ Naragakuen University ²⁾ Nara Medical University ³⁾ Kansai University of Nursing and Health Sciences ⁴⁾ Nara Medical University Hospital

要旨

実習は看護学教育の中核で最も重要な教育形態である。看護基礎教育の最終学年における統合実習で、著者は学生自ら課題を設定し、看護の現象に対して探究心を持つことにより、研究的手法を用い、臨地・臨床の課題を見出し、情報収集、計画立案、調査、考察と発表を行うという教育設計を採用している。実習の目標は 1) 多角的な視点から捉えた各自の探究テーマの設定ができる、2) 各自の実習計画立案ができる、3) 推論・論証を活用した主体的な学習を持続できる、の 3 点である。大きな特徴は個々の学生が主体的に実習を自らデザインすることにあり、教員は学生の探究をサポートし、実習施設との調整役、学生、実習施設相互の学びを促進する役割を担う。

キーワード : 統合実習、主体性、探究、言語化、課題発見、実習デザイン

はじめに

大学看護教育における実習の位置づけ—研究的取り組みの場

看護学教育において、実習は「看護学教育の中核」、「独自かつ特徴的であり最も重要な教育形態」と日本学術会議の報告は述べている（日本学術会議 2017）。量的に見ると、実習の占める位置は大きく、大学における看護教育では、総時間数の 25%以上を実習が占めている（第 9 回看護基礎教育検討会 2019）。臨地実習の学習内容としては、同報告では「看護専門職として為すべ

きこと、為しうることを、挑戦すべきことを見極め、根拠を持って看護を思考し、実施、評価するまでの一連のプロセス」の体験としている（日本学術会議 2017）。ここで注目すべき点は、ともすれば手技偏重になりがちな臨地実習が「研究的取り組み」の場であり、中でも重要な点は「学生自ら課題を設定」することであるとされていることである。同報告では、「学生自ら課題を設定し」、「看護の現象に対して探究心を持つことにより、研究的手法を用い、臨地・臨床の課題を見出し」て、情報収集、計画立案、調査、

考察と発表を行うことが期待されているとしている。(日本学術会議 2017)

臨地実習の中での統合実習の位置づけ

「研究的取り組み」と「学生自ら課題を設定」することは、臨地実習の最終局面である統合実習において、なおさら意識すべき点である。2006年でカリキュラムに初めて導入された統合分野では「臨床実践に近い形で知識・技術を統合する」とことと、技術修得の充実が主な目的とされていた。(厚生労働省 2007)。

統合分野の導入自体は評価すべきであるが、2006年改正時の問題点は、統合実習は卒後へつながる力の獲得を目指すと言われたのに、項目の列挙のみで具体的な目標が記述されず、結果的に目標が曖昧になっていたことであった。つまり、チーム医療、他職種との協働、メンバーシップ及びリーダーシップ、マネジメント、医療安全、災害看護、国際社会での協力、看護技術、複数の患者受け持ち、一勤務帯を通した実習、夜間実習など、さまざまな性質の項目が混在し、獲得を目指す能力内容の記述は乏しかったのである(厚生労働省 2007)。

この点について、2019年の検討会報告書では求められる能力内容が記述されたことは大きく評価すべきである。同報告書では、卒業時の到達目標として提示された看護師の実践能力は5群あるが、概ねⅠ～Ⅲ群は統合実習に至る前までの教育課程で目標とする能力群であり、Ⅳ群「ケア環境とチーム体制を理解し活用する能力」とⅤ群「専門職者として研鑽し続ける基本能力」は主として統合分野で到達すべき目標である。例えば、Ⅴ群のうち「継続的な学習」の構成要素

として「看護実践における自らの課題に取り組み、継続的に専門職としての能力の維持・向上に努める必要性と方法を理解する」という到達目標が示された(厚生労働省 2019)

このように具体的な到達目標が言語化されることで、2006年カリキュラムではばらばらな項目に過ぎなかった事柄が、より有機的な能力の要素となり、カリキュラム改正の趣旨は共有しやすくなり、現場の教育者は、統合実習での到達すべき能力内容が共有でき、よりその目標を意識して実習を組み立てやすくなったと言えるだろう。

A 総合医療センター・B 大学附属病院における統合実習の試み

我々は2019年の検討会に先立つこと4年前の2015年から、4年次での統合実習の目標を、学生が自ら課題を発見し、解決を図り、卒後も主体的に課題発見力、解決力を発揮できるようになることとして実施してきたので、その取り組みについて報告したい。我々の統合実習には大きく二つの特徴がある。

(1) 主体的な課題選択・計画立案

課題発見・解決力は患者ケアや看護システム内での活動で生涯にわたって必要とされる力であるという考えから、我々は主体的な課題選択を重視した統合実習を実施した。課題発見力・計画立案力・実践力は、一般的な能力とされるジェネリックスキルのうちの汎用的対応能力(コンピテンシー)に含まれる対課題基礎力の中核的な能力群であり、学士課程教育においてとりわけ必要とされる能力であり、「学生参加型授業」、「協調・協同学習」、「課題解決・探求学習」

などの必要性が指摘されていた（文部科学省 2008、）。

この実習の特色の一つは、学生が個人個人でこれまでの学びを統合して課題を主体的に選択し、課題探究・解決にむけた実習計画を自分で企画し、実施・評価することであり、そこが、3年次までの臨地実習とは違う点である。従って、各人のテーマは各人の関心によるため、多様であり、実習現場も各人各様となる。例えば「がん患者の継続支援」、「先天的奇形で生まれた子どもへの愛着形成」、「看護師の能力獲得と卒後教育支援」など、実に多様なテーマを学生個人の関心から課題としてあげていた。学生自ら実習計画を企画するため、学生各自のテーマが可能となる実習現場の確保については教員が最大限努力するという方法をとることで、我々は学生の主体性を最大限に保証するよう努めた。

(2) 病院との強力な連携

学生個々の課題選択・計画立案を可能にする実習の教育設計には、病院の看護管理部門、看護教育部門の協力・連携が前提条件になる。学生個々の多様なテーマの実習を可能とするためには、実習設定可能な各部署の選定、教育支援が可能な臨床指導者の日程調整および関係各部署との細かい調整が必須であり、そのためには、まず実習施設の看護管理責任者が我々の統合実習の趣旨に関心を持ち、その意義に賛同し、調整に全面的な協力体制をとることへの同意が絶対条件となる。

我々は実習プログラム内容とその趣旨を看護管理部門・看護教育部門に分かりやすく伝え、学生が主体的な課題発見力・解決力をつけることが、卒後の能力発揮にも影響

することへの理解を得るように努めた。次に、病院の看護管理部門、看護教育部門と教員が学生のテーマとその理由を共有するために、学生はテーマ・理由を明確に言語化する工程を重ねる必要があり、それにはかなりの時間を要した。その工程については後に詳述する。

さらに、場合によっては、看護管理者が実習計画の調整のために直接学生にテーマ・理由の聞き取りを行うこともあった。このようなプロセスを経て、学生個々の実習計画、適切な現場選択が実現可能となった。我々の統合実習において、こうした病院の看護部門の全面的な協力が不可欠であった。

単位数・時間・実施時期

統合実習は2単位90時間として、4年次に配当されている。注意を要する点は、4年次には様々な科目が設定されているので、学生の履修状況と実習現場の状況とを勘案して実習スケジュールを個々に設定する必要があり、教員、実習現場双方の調整にかなりの労力を要する。

実習の2単位90時間の内訳は以下の通りである。

- 1) 実習計画概要発表—学生は全員参加
- 2) 個別実習計画実施—各項目は一日に1項目実施の場合と、2項目実施の場合がある。施設、担当者の都合に合わせて2か月の間に、延べ8～10日間で実施する。
- 3) 実習まとめ—学生は全員参加
個別の実習日程例は後述する。

統合実習の実習目的・目標・内容

＜教員・実習施設の看護管理部門、教育部

門・学生は以下の統合実習の実習目的・目標・内容を共有する>

目的：各実習施設に共通した統合実習の目的は、知識や体験を統合して看護実践力を培うこと、学生は個人別探究テーマ(課題)を持ち、そのための学習計画を個人別に作成し、探究的な学びを深めることである。

目標：学生が以下の点に到達することを統合実習の共通した目標としている。

- 1) 多角的な視点から捉えた各自の探究テーマの設定ができる
- 2) 各自の実習計画立案ができる。
- 3) 推論・論証を活用した主体的な学習を持続できる。

内容：統合実習での探究テーマには組織マネジメント・他職種との専門連携・継続看護・キャリア開発などを含んで、学生が個々に考案する。学生主体のカンファレンスで各自の学びを言語化し共有する。

例1：継続看護を中心とした実習

緩和ケアや回復期リハビリテーション看護、退院後の生活を考えた看護の継続性などをテーマとする。実習で設定できる場面としては、他職種との連携、他施設との連携、病院から在宅への看護の継続など。

例2：組織マネジメント・キャリア開発を中心とした実習

専門外来における患者のQOLの取り組み、組織横断的な看護師の活動、看護師の継続教育による専門性の確立などをテーマとする。実習で設定できる場面としては、専門看護師等のシャドウイング、ラダー研修、看護研修、師長会の見学参加など。

実習の展開手順

実習の展開は以下の順に実施する。

1. 探究テーマと理由の言語化

a) まず学生が興味、関心を持っているテーマとその理由について記述し、その記述内容をもとに学生と教員はさらに明確な言語化を目指す。

例えばがんに興味を持っている場合、受け持ち患者ががんで切除した、切除していないが放射線、化学療法などで身体的苦痛や仕事などの社会的な困難を来した、などの事例、興味を持ったきっかけや状況をまず共有する。共有した事例、興味のあるテーマについて、学生は使用している言葉の定義の確認、および当該テーマについて論文で先行研究を調べるなどの準備を行う。学生は、こうした準備作業を通して、学びを深めたい視点を明確に言語化していく。教員はこのプロセスを終始共有して、学生によっては10回以上のやりとりを行い、サポートする。その結果を学生が探究テーマ、なぜ関心を持っているか、どのような探究を目指すかを中心に1600字程度で言語化する。以下に示す学生の言語化の例は、個人が特定できないように配慮して抜粋し、その旨は学生にも周知している。

【言語化の例】

学生 A(抜粋)：【探究テーマの背景としての領域別実習での経験】大腸がんの直腸切断術とストーマ形成術を受けた患者、転移への化学療法、追加の切除術を予定している。(患者の発言)「まだストーマに慣れていないし、装具交換は自分でできないから妻にしてもらっているけど、妻は頻繁に面会に来ることができない。手術を受けた病棟では看護師さんが手伝ってくれたけど、ここは化学療法の病棟だから看護師さんは手伝ってくれない。」「手術はもう嫌。もう二度とあんな痛い思いしたくない。でも、このことは看護

師さんや家族には言わないで。」(学生が認識した看護の必要性)患者の途切れることのない苦痛や不安、がんの化学療法、放射線療法、手術療法といった集学的治療を受ける患者に対する継続した看護の必要性を感じた。【学生の探究テーマ】患者が、苦痛や不安のなかで、治療に前向きになり、セルフケアを継続するためには必要な援助について、病棟、外来、地域の等多角的な視点で考えたい。支援を高めるための専門性を高める教育についても学びたい。

b) 学生が提出した探究テーマ、理由をもとに、教員は候補となりうる実習施設、実習内容を提示した上で、学生が最終的に学びたいテーマ、実習施設、実習内容を決定する。

2. 実習施設とスケジュールの決定

a) 教員は実習施設の看護管理部門、教育部門と、学生の希望テーマ、希望実習内容について相談し、最終的に活用可能な病院施設と実習支援にあたる病院職員、スケジュールを決定する。

b) 学生は、決定した実習施設の特徴をふまえ、必要となる事前学習事項を箇条書きにピックアップし、その事前学習には個々の学生が主体的に取り組む。

c) 上記内容をもとに、学生は各自が可能な選択肢から実習施設、実習内容、スケジュールを選択して最終決定し、各自の実習計画を作成する。学生が立案した実習目標、実習方法について、必要に応じて学生が実習担当者にプレゼンテーションを行い、場合によっては、実習担当者から実習計画についての助言を得る。

3. 実習日程

1) 実習計画概要発表—学生は全員参加

2) 個別実習計画実施—2か月間の間に、延べ8～10日間で実施する。

3) 実習まとめ—学生は全員参加

*個別実習例：学生 A テーマ【がん患者への継続支援での看護師の役割】

以下に示す個別実習例は、個人が特定できないように配慮して抜粋し、その旨は学生にも周知している。

患者自身が自宅で適切なセルフケア行動をとりながら治療の完遂ができるよう、治療開始時から患者の不安に配慮した対応と、セルフケア能力に応じた有害事象への予防的・治療的対応は、医療スタッフに求められる支援である。がん患者にとっては、副作用症状をコントロールするセルフケア能力が特に重要である。しかし、外来通院治療では、セルフケアに必要な知識の提供と患者と一緒に解決方法を検討する十分な時間を確保することが難しく、患者の苦痛・治療継続へ困難感が増大していると感じている。通院治療するがん患者へのサポートシステムが必要であると考えるので、看護職が主導して症状の改善・自己管理の支援を行う看護専門外来を中心に、がん患者のセルフケアへのサポートを学びたい。

(病院が提案する部署を踏まえた)実習計画：①看護師長会見学—②PNS(パートナーシップ・ナーシング・システム)マインド研修—③外来化学療法 シャドウイング—④既卒1ヵ月目の新人研修見学参加—⑤がん専門看護師(CNS)シャドウイング—⑥看護師長会見学—⑦がん専門看護師(CNS)シャドウイング2回目—⑧認定看護師(CN)専門看護師(CNS)会議見学—⑨乳がん認定看護師(CN)シャドウイング—⑩新卒1ヵ月目の新人研修見学参加—⑪地域連携室見学—⑫乳がん認定看護師(CN)シャドウイング2回目—⑬感染委員会見学—⑭外来化学療法 シャドウイング 2回目—⑮実習まとめ

＊個別実習例：学生 B テーマ【看護の質の向上と人材育成・活用】

看護の質を高めることは、患者の生活の QOL に直結し、患者は看護力に大きく影響を受ける。看護師の質向上のための看護教育の取り組みは、看護師一人人として、組織としての能力向上への意識や意欲にどのような変化や効果をもたらしているのか、どのような困難課題が生じているのか学んでいきたい。加えて、CNS や CN などの専門性の高い看護師は専門能力を活用して組織の看護の質向上に繋げているのかを学びたい。
 (病院が提案する部署を踏まえた)実習計画:
 ①リソースセンター(CNS)－②リソースセンター:C3(CNS)③⇒リソースセンター(CNS)pm～特定行為研修”－創傷相談室(CN)－ｽｰﾏ外来・褥瘡回診”－創傷相談室(CN)－病棟ラウンド”－摂食・嚥下(CN)NST”－”看護師教育(看護実践・キャリア支援センター)－新人教育研修の実際”－摂食・嚥下(CN)－最終カンファレンス”

実習最終日には各自学びの内容を A4 用紙 2 枚程度にまとめ、発表する。以下の学生の学びは、個人が特定できないように配慮して要約、その旨は学生にも周知している。

学生 B の学び(要約)
 ①教育配属部署に関連し、看護師のニーズに沿った学習を提供する支援体制の例として、ICU での短時間学習が、現場にすぐに活かせる題材を扱い、学習ニーズがあり効果的である。
 ②一方的なプログラムでは学習者が受動的になり、意欲が低下し、能力以上を求められている負担感による意欲減退も考えられるので、能力の把握も教育設計には重要である。
 ③教育者が抱える困難課題として、教育方法が「このままで良いのか」という戸惑い、専属の教育担当者になると現場から離れるので、現場の実

情・ニーズを直接感じられず、臨床現場が求める人材育成プログラムの計画の障壁となり、プログラムに自信を持たずに実施する実態、などがあった。

④ ③の問題への対策として、教育担当者委員会が設置され、臨床現場に応じた教育プログラムの作成・実施、プログラムの振り返り、改善が可能になり、教育の質が向上して、看護の質向上が期待できる。

⑤CN、CNS の活動については、スペシャリストとジェネラリストの協同は双方の看護力の向上に役立ち、ジェネラリストの力を引き出す関わりがスペシャリストにとって学習機会となる。

⑥CN、CNS の活動において、特にリンクナースの設置による協同は、病棟や患者に応じた個別性の高い看護ケアという利点がある。病棟全体に周知が行き渡りやすく全員が共通認識を持つことで、組織としての看護の質向上も同時に期待できる。

⑦看護実践の場における教育では、絶え間ない自己研鑽と組織における役割の認識や能力発揮、様々な教育や学習機会の設定、意欲を引き出す教育設計が必要であると感じた。教育担当者は、個々の学習ニーズを満たし、同時に組織として一定レベル必要とされる能力の育成を目指す教育を仕掛ける必要がある。看護師は集合研修で得た学びを、現場での OJT によって実践的に定着させ、学習の必要性を看護師が自ら意味づけできることが求められる。

まとめ：本統合実習の教育設計

主体性と言語化

この統合実習の特色は何といても学生が主体的にテーマ、実習内容を考案することから始まる点にある。学生はまず実習を通して深めたい学びの内容を言語化する。場合によっては、実習で学びたい内容を実

習施設の担当者にプレゼンテーションし、最後のまとめでは各自の学びを発表するわけであるが、それらの活動はすべて学生が自分の考えを言語化することが中心である。

つまり学生は看護基礎教育の最終局面において、既に学んだことを統合し、将来へ向けた発展を目指して、自らの実習をデザインするという初めての経験をすることができる。実習を自らデザインするという経験は、自ら課題を発見して探究するという知的活動を中心においているために、個々の患者のみならず看護というものの全体像を同時に視野に入れて統合するという経験なのである。これは将来にわたって、看護に存在する問題を発見し、課題解決に向けた探究を行うという活動の最初の経験であるとも言える。

学生の考えの言語化からその経験が始まることは、看護師が建設的な議論や課題発見・計画立案力が比較的弱く、他者への委嘱、自らの考えの言語化が弱い傾向があると言われていること（西菌 2022）を考えると、その弱点を補完する学びとなっていると考えられる。

この実習ではそうした経験、学びを、すべての学生が個別に体験できるので、卒業後の看護師としての発展に寄与することが多いに期待できる。

学生の探究のサポート役としての教員

教員は学生の主体的な探究を支援し、言語化された実習内容を実現できるように、実習施設と調整を図るので、あくまで実習のサポート役に徹するのが、この実習における教員の役割の特徴である。従来の権威主義的な「教える」というアプローチとは全

く逆であることに、教員は留意する必要がある。学生の主体性を引き出すためには、自由放任でよいというわけではない。教員は、学生が関心を持つ様々なテーマについて、幅広い知識が必要となり、教員自身も学生と並走した探究の継続が求められる。

実習施設との調整役としての教員

もう一つ重要な教員の役割は、実習施設と協働する能力である。学生の希望を実習施設に上手く伝え、実習施設で実習を支える体制がうまくできるように実習施設からの協力を得られるようにすることが、実習を実施する上で欠かせない準備となる。さらに、実習施設へ学生の実習の学びを返すという意味でも、学生と実習施設の互いの学びを深めることを促進する役割を担うのも教員である。

将来の研究へむけて

本報告では、萌芽的な試みとして著者が考案した「学生自ら課題を設定し」、「看護の現象に対して探究心を持つことにより、研究的手法を用い、臨地・臨床の課題を見出し」て、情報収集、計画立案、調査、考察と発表を行う統合実習の概要を記述した。著者は、学生の手ごたえを実感としては感じているが、客観的な評価指標による評価、確認には至っていないので、今後客観的評価を行う予定である。また、このような統合実習を、著者のみならず広く看護教育に広めていく意義があると考えている。

謝辞

振り返ると、ここで報告している方法による統合実習を開始したのは5年前のこと

になる。初めての形態の実習であったが、趣旨を理解していただき、全面的支援を頂いたのが当時の実習先の看護部長、同次長の方々であった。また、2021年度からあらたな実習先である大学附属病院の看護部長、副部長の方々を中心として、いずれの施設においても師長・主任・CNSの方々の全目的な協力を頂いてこそ、実施できた統合実習であった。臨床施設のご協力によってこそ、学生が主体的にデザインする実習が実施できたことを感謝申し上げます。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はありません。

引用文献：

日本学術会議報告（2017）；大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準；看護学分野

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170929-9.pdf>,15-6.

2022.3.11 取得.

厚生労働省（2007）看護基礎教育の充実に関する検討会報告書

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, 7. 2022.3.11 取得

第9回看護基礎教育検討会（2019）

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_06747.html 2022年3月12日取得

文部科学省中央教育審議会大学分科会・学士課程教育の構築に向けて（2008）；

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm

2022年3月18日取得

西園貞子, 箕浦洋子, 松村直樹（2021）；看護職固有のコンピテンシー（成果を生み出すための能力）テストの開発—評価テストの活用による組織マネジメント, 看護管理学会 学術集会

西園貞子, 箕浦洋子（2022）；看護師の汎用的対応能力(コンピテンシー)の実態調査：モデル社会人との比較, 医療教授学会, 第8巻, 掲載予定

表1. Aさんの実習スケジュール

月	火	水	木	金
4月×日	4月×日	4月×日	4月×日	4月×日
		計画概要発表 日程打ち合わせ		
5月○日	5月○日	5月○日	5月○日	5月○日
	看護師長会 AM PNS マインド研修			
5月○日	5月○日	5月○日	5月○日	5月○日
		外来化学療法シャド 既卒1ヵ月フォロー		がん CNS シャドー
5月○日	5月○日	5月○日	5月○日	5月○日
	看護師長会 がん CNS シャドー CNCNS 会議		乳がん CN 新人1ヵ月研修	
6月△日	6月△日	6月△日	6月△日	6月△日
		地域連携室	乳がん CN シャドー	
6月△日	6月△日	6月△日	6月△日	6月△日
感染委員会		外来化学療法		
6月△日				
実習まとめ:				

表2. Bさんの実習スケジュール

月	火	水	木	金
6月□日	6月□日	6月□日	6月□日	6月□日
				リリ-スナーセンター (CNS)
7月*日	7月*日	7月*日	7月*日	7月*日
リリ-スナーセンター CNS)	リリ-スナーセンター (CNS) pm~特定行為研修	創傷相談室 (CN) スト-マ外来-褥瘡回診		
7月*日	7月*日	7月*日	7月*日	7月*日
創傷相談室 (CN) 病棟ラウンド	摂食・嚥下 (CN) NST	看護師教育;看護 実践・キャリア支援センター 新人教育研修実際	摂食・嚥下 (CN) 最終カワアルス	